

ルイビル大学滞在記

経済学部教授 西原 宏

ルイビル (Louisville) は、米国ケンタッキー州北部にある人口27万人程の市で、全米3大ダービーの1つであるケンタッキーダービーや多くのメジャーリーガーの愛用するルイビルスラッガーというバットで有名である。この市のルイビル大学に、2003年8月より1年間在外研究として滞在する機会に恵まれた。以下は、その報告としての雑文である。

滞在先をルイビル大学にしたのは、そのナハタ教授が十数年来の知り合いであったからで、現地では教授に大変お世話になった。6歳と9歳の子供を引き連れた身としては、心底助かった。大学では研究室を貸してもらい、教授は私の英会話の面倒までみてくれた。

朝、子供達を小学校に送ってから研究室に入ると、しばらくして、「オッハヨーゴザイマス」という変な日本語の挨拶とともにナハタ教授は登場する。2人でラウンジにコーヒーをもらいに行き、帰ってくると私の部屋でしばしの雑談。ヒヤリングの拙い私のために毎朝のように小話をしてくれた。Research という堅い雑誌の紙面であるため、一番面白かったものが紹介できなくて残念だが、例えば・・・When President Bu** died, he met St. Peter at the gate of heaven. As the gatekeeper, St. Peter said “ I must ask you some questions before deciding whether or not you can enter heaven. ” “ All right, ” responded the president. St. Peter asked him the first question. “ What days of the week begin with ‘ t ’ ? ” The president answered “ today and tomorrow. ” “ I accept your answer, ” said



ルイビル大学経済学部研究棟の前で

St. Peter, before asking the next question. “ How many seconds are there in a year? ” The president answered “ Twelve. ” “ Why? ” asked St. Peter. The president counted “ January second, February second, ... ” 大統領というのは盛んにこのような小話のネタにされるようだ。蛇足ながら、この小話を家に帰って息子にしてやると息子が言うに「お父さん、それは変だよ。大統領のように数えとしたりしたら24の筈だよ。」「何で?」「January second, January twenty second, ...」

変な雑談ばかりしていた訳ではないので、研究の話も少し。研究では、紆余曲折の末ホテリングモデルを分析した。これは、非常にポピュラーなモデルだが、簡単にあらましを述べると次のようなものである。同質の商品を生産して

いる2つの企業がある。消費者はある線分上に分布している。2つの企業は、その線分上に商品を販売する地点を選ぶ。地点が決まった後、販売価格を決める。消費者は商品の価格と販売地点までの移動コストを勘案して総費用が少ない方の企業から商品を購入するとする。これは、例えば、1本の大通り沿いに住宅地があって、2つのスーパーマーケットが大通りのどこかに出店し、その後、価格競争をする状況を表している。このモデルは、童謡で言えば「鳩ぽっぽ」くらいに大変ポピュラーなのだが、分析の進展が驚くほどゆっくりである。Hotelingによる最初の論文が出されたのが1929年、部分ゲーム完全均衡という概念を使って厳密に分析されたのがそれから半世紀も後の1979年、さらに、あまり価格が高ければどちらの企業からも買わないというごくふつうの選択肢を消費者がもつように拡張されたのがさらにその15年後の1994年である。しかも、この1994年の論文では、消費者がその商品から受ける便益についてかなりきつい制限を設けていた。制限を設けないと、様々なケースについて異なるタイプの均衡が出てきてしまい、分析が複雑になるからである。その制限を取り払い一般的な設定のもとでどのような均衡が存在するかを私は調べた。

1994年の論文のほぼ完全な一般化をやってナハタ教授に結果を聞いてもらおうと面白がってくれたので、すかさず引っぱりこんで共同論文とした。現在投稿中のこの論文であるが、総ページ数59ページのうち Appendix が40ページ、Appendix の全てが命題の証明という、査読者泣かせの論文である。

最後にこれから米国に在外研究に出かける方のために役立つと思われることを思い付くままに記しておこう。

1. 福岡銀行などのバンクカードは海外のキャッシュコーナーで使えて便利である。引き出すのに手数料がかかるのと、引き出せる

金額に制限があるので、もしかするともっとうまいやり方があるかもしれないが、およそどこのスーパーでも（もちろん銀行でも）バンクカードの使えるキャッシュコーナーがある。

2. 旅立つ前に、Yahooなどのメールアドレスを取得して（手数料無料、5分でできる）、福大に来たメールは情報センターに頼んでそちらに転送してもらっておくと安心である。私はこれを怠ったため、Eメールの受信にブランクができてしまい心配した。
3. 何故か米国には大工道具のキリがないので、他の荷物といっしょに日本から送ることを勧める。壊れたタンスの引き出しを直すためにキリが必要で Home Depo というダイクスのような店で探したが、ついに見つからなかった。電動ドリルはあるが、そんなもの1年間の滞在のために買いたくない。店の人に聞いたら「釘を打ってそれを抜いたら穴ができよう」などと言っていたが、ドリルのなかった時代に米国の大工さんはいったいどうやって穴を空けていたのだろうか。
4. 文房具は日本の物を送ることを勧める。米国には手回し式の鉛筆削りがなく、電動式のものも安いものは性能がよくない。鉛筆や消しゴムも品質が悪い。
5. 逆に日本食は心配いらない。普通のスーパーマーケットで、うどん、そうめん、そば、麵つゆ、のり、味噌などを売っており、簡単に手に入る。
ささやかな提案だが、在外研究における生活上の知識、例えば、子供の教育、住居、食生活、引越し、医療、自動車の購入のことなどを自由に書き込めるホームページを学内に作ってはどうかだろうか。私の話などはたいした内容ではなかっただろうが、多くの方々の体験談の蓄積はこれから在外研究に出られる方の貴重な情報源になると思う。

サンフランシスコ滞在記

商学部教授 笹川洋平

2003年8月から1年間、長期在外研修でゴールデンゲート大学エドワード・S・アジェノ（以下、GGUと書きます）経営大学院へ客員教授（visiting professor）として滞在した。

1日の中に4季のある街

サンフランシスコ市はアメリカを代表する都市の1つであり、半島の突き出した部分に位置する人口80万人の全米有数の都会である。

気候は四季を通じて日中は温暖であるが、1日に気温が8度～22度まで変化するので「1日の中に四季がある街」といわれることもある。治安は昼夜を問わず良好である。サンフランシスコはケーブル・カーが有名であるが、路線が網の目状に走っている市バスのほうが実用的であり、トークン（1袋10回分、\$10.50）を購入すれば便利でお得である。自家用車がなくても不自由なく生活できるのも、サンフランシスコの魅力の1つである。

査証の取得

9.11テロ以降、アメリカ合衆国の査証審査は幾度か変更され、査証の発行は極めて厳しくなっている。2003年も米国への査証発行手続きの変更があり査証申請者は在日米国領事館（西日本居住者なら大阪領事館）へ出向き担当官の面接を義務づける変更が行われた。私は受入先のGGUの国際課の担当者に事情を説明し、超・短期間で申請書類を整え、面接が導入される直前の旧制度の下で査証申請を行うことがで

きた。もっとも、家族全員の査証が発行されたのは渡米の10日前であった。

サンフランシスコ市到着

サンフランシスコ国際空港に到着し、荷物搬送用リムジンでホテルに到着。ホテルからGGUの経営大学院マーケティング学科の主任をされているシャルミラ・チャタジー先生へ電話し、到着したことを伝え、その日の内に先生の研究室を訪問した。チャタジー先生はインドの工科大学を卒業され、ペンシルヴェニア大学で学位をとられてGGUに職を得られた才女で、気さくな方でもあり、研究室で30分ほどお話しした時も笑いが絶える事がなかった。チャタジー先生との歓談中、GGUの事務局長より私の同大学での地位に関する説明を受けた後、先生に大学の周辺を案内して頂いた。

GGUは有職者の教育を目的とするYMCAの外郭組織として設立され、1901年に独立し大学へ改組され、現在では商学、法学、課税学（taxation）、技術（technology）の4分野の学部大学・大学院とインターネットを利用した通信制大学（「サイバー・キャンパス」と呼ばれている）を展開する私立大学であり、サンフランシスコの金融街の一角に立地し、教室、研究室、図書館、事務所など基本的な施設は2棟の建物の中に効率的に配置されている。私の研究室は大学院研究室フロアにあり、机、応接セット、書類整理箱、学内LANに接続されたパソコンが完備されており、GGUの配慮に感謝した。

アパート探し

住居が決まらなると、アメリカで生活する上で早晚必需品となる3大ID（銀行口座、運転免許証、社会保障番号）を取得することはできない。9.11テロ以降、アメリカ在住の合法移民（＝長期滞在外国人）は国土安全保障省の居住者データベースへの登録が義務づけられている。ホテルの住所では登録できないので、早速住居探しを始めた。急坂のサンフランシスコの街を娘2人を抱えて歩き、入り口に「For Rent」の看板が出ている建物を片っ端からチェックし、ホテルへ戻って電話するという「絨毯作戦」を展開した。中でも「W.M.Properties」という不動産管理会社が管理するアパートはバス停にも近く、安全で閑静な住宅街にあり申し分なかったため、借りることにした。管理会社の営業課長は日系人と結婚している女性で、大変好意的な対応をしてくれた。私が1年で帰国するというと、ベッド、食器、電話機、ビデオ、テレビ等の家具類が保管されている倉庫へ案内され、気に入った家具を選ばせてもらい、部屋へ運び込んでくれた。搬入出料（\$150×2）の請求以外、家具類は無料で借りることができた。同社の日常のメンテナンスは良好で、大変良心的な管理会社だったと思う。もしサンフランシスコに行かれるのであれば、同社のウェブ・サイトにアクセスして物件を検討されてはいかがだろうか。

経営大学院の日常

私はGGUでの研修期間中、チャタジー先生のご厚意で修士課程の2クラスと博士課程4クラスに出席させてもらい、アメリカの経営大学院の講義を存分に体験することができた。GGUの経営大学院の修士課程には中級管理職を目指す有職学生の比率が高く、教室では若い学生達の間断ない発言が続き、騒々しい程であった。

これに対し、博士課程の学生は企業の上級管

理者や会社経営者の割合が高く、教室は修士課程の騒々しさとは無縁の落ち着いた雰囲気であった。私が出席した講義でも大手情報機器会社の上級管理者、フォーチュン500社ランク企業のオーナー経営者、大手小売チェーンの西部地区責任者、生フルーツ・ジュース店を全米に展開している若手経営者等があり、授業中は相手の話をよく聞いてから発言する人が多かった印象がある。

アメリカの大学・大学院では、学生は書籍、論文、財務資料等、膨大な量の講義資料を読み込んで出席することを求められる。GGUも例外ではなく、学生たちは講義資料を読んで来ないと発言すらできないので必死で大量の文献を読んでいた。私も最低限のマナーとして2つの事を実行することにした。配布資料には目を通して出席することと、発言＝講義への付加価値と言われた手前、超・下手くそな英語で毎回の学生のプレゼンにはコメントを付けることである。おかげで寝る時間は朝、英語は今思い出しでも赤面する。

講義に出席する程、相手の言ってることが聞き取とれないという困ったこともあったが、それを苦痛とは感じなかった。アメリカ社会に少しでも溶け込もうと移民向けの無料英語学校へ毎日通っている妻や、言葉の壁を超越して元気に友達と遊んでいる娘たちから元気をもらっていたからだろう。1年間ではあったが、多くの素晴らしい人たちとの出会いがあり、本当に幸福な1年を過ごすことができたことに感謝するばかりである。

サンフランシスコで過ごした1年間は私と家族にとって最大の財産となることでしょう。長期在外研修という貴重な機会を与えて下さった福岡大学の皆様へこの場を借りてお礼を申し上げます。